

T2K オープンスパコン運用終了記念シンポジウム開催報告

東京大学情報基盤センター

T2K オープンスパコンとは、筑波大、東大、京大から構成される Supercomputer Alliance の掲げる、「ハードウェアアーキテクチャのオープン性」、「システムソフトウェアのオープン性」、「ユーザ・ニーズに対するオープン性」という 3 つの理念のもとに策定された「T2K オープンスパコン仕様」に基づく筑波大、東大、京大の3つのスーパーコンピュータシステムであり、2008年6月2日に同時に運用が開始された。

それから6年、2014年3月10日のT2K 東大の運用終了を以て、T2K オープンスパコンはその全ての運営を終えることとなった。そこで、改めて T2K オープンスパコンとは何であったのかを振り返るとともに、T2K がもたらした成果の検証、更に将来への展望について議論を実施するため、5月30日（金）の午後に筑波大、京大と共催にて「T2K オープンスパコン運用終了記念シンポジウム」を東京大学本郷キャンパス工学部2号館(本郷) 213号講義室で開催した。当日の参加者は129名（大学・独法等研究機関47名、企業他67名、関係者15名）であった。

まず、第1部は「T2K オープンスパコンの目指したもの」として石川 裕（東京大学）より基調講演が行われた。

続く第2部では、筑波大学（梅村 雅之、朴 泰祐）、東京大学（中島 研吾）、京都大学（中島 浩）の3大学より T2K の成果および現状について報告された。

休憩をはさみ、第3部は「ポストペタ・エクサスケールシステムへ向けての取組」として、ポストペタ CREST プロジェクトの紹介が行われ、「ポストペタスケールデータインテンシブサイエンスのためのシステムソフトウェア」（建部 修見（筑波大学））、「ポストペタスケールに対応した階層モデルによる超並列固有値解析エンジンの開発」（櫻井 鉄也（筑波大学））、「ポストペタスケール時代に向けた演算加速機構・通信機構統合環境の研究開発」（朴 泰祐）、「自動チューニング機構を有するアプリケーション開発・実行環境」（中島 研吾）の発表があった。

第4部は「ポスト T2K に向けて」として、佐藤 三久（筑波大学）より将来の展望について講演が行われた。

最後に閉会にあたり中村宏（東京大学情報基盤センター長）より挨拶があり、シンポジウムは盛会のうちに終了した。



シンポジウムの様子